

# 翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

## 目次

### 翻訳の現状

#### - 翻訳者不足

産業翻訳で実績のある人から、出版翻訳の仕事を探すのは難しいのかと聞かれることが多い。そういう質問を受けるたびに、いやとくに難しいわけではないと答える。なぜなのかを説明しておこう。

### 翻訳批評

#### - 池央耿訳『南仏プロヴァンスの12か月』

正月には琴が似合う。和服が似合う。そして何故か、池央耿の文章が似合う。『南仏プロヴァンスの12か月』（河出書房新社）を読んでみたくなる。

### 翻訳出版の現状

#### - 古典翻訳の鼓動

出版翻訳業界では、古典翻訳への関心が高く、しかも数年前とは考え方が大きく変わっている。古典新訳の流れが本格化するには何が必要かを考えていく。

**翻訳通信** 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

**定期購読の申し込みと解除** <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

**バックナンバー** <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

### 翻訳者不足

昨年は『翻訳通信』をきっかけに、産業翻訳で実績のある翻訳者と話す機会が何回もあった。そのような機会に毎回でてくる話題について触れておきたい。

いつもといっていいほど質問を受けるのは、出版翻訳の仕事を探すのは難しいのかという点である。そういう質問を受けるたびに、いやとくに難しいわけではないと答える。なぜなのかを説明しておこう。

翻訳の仕事をはじめたときは、産業翻訳だけを扱っていたし、いまでも収入の半分近くは産業翻訳によるものなので、出版翻訳と産業翻訳の両方がある程度まで見渡せる位置にいる。もっとも、翻訳の世界は極端に細分化されているので、直接に知っているのはごく一部だけだ。知り合いから話を聞くなどの方法で、少しは広い分野にわたって知識を仕入れているが、もちろん、まったく様子が分からない分野も少なくない。そのような立場からの発言として、以下を読んでいただきたい。

狭い経験からいうなら、産業翻訳と出版翻訳でとくに質の高さに違いがあるわけではない。出版翻訳の方が産業翻訳よりも質に対する要求が厳しいわけでもない。産業翻訳の方が質に対する要求が厳しい例も少なくない。だから、産業翻訳で一流の仕事をしていれば、出版翻訳でも一流として通用するはずである。質という点で出版翻訳のハードルがとくに高いとは思えない。

もうひとつ、出版翻訳者は層が厚いので、新規参入の余地はそうそうないのではないかという質問がある。これは需要と供給の問題である。出版翻訳の需要は限られているのに、翻訳者の数でみた供給が十分にあれば、新規に参入するのが難しくなるはずだ。

だが、これも大部分は見かけだけだといえる。たしかに出版翻訳者は多い。しかし、発注者である出版社の編集者からみて、翻訳者の数が十分にあるとはとてもいえないようだ。少なくとも知っている範囲ではそうだ。

この点は簡単に確認できる。自分が好きな分野、出版翻訳で取り組みたい分野の代表的な翻訳書を何点か検討してみる。分野によっては、さすがに素晴らしい

翻訳ばかりだと思える場合もあるだろうが、そのうち何点かは自分ならもっとうまく翻訳してみせると思えるものである場合が多いはずだ（とくに、産業翻訳と重なる部分があるノンフィクションの分野でそう思えることが多いはずだ）。そう思えるのであれば、そして、その見方が客観的な根拠のあるものであれば、出版翻訳者の層は見かけほど厚くない可能性が高いといえる。

じつのところ、この方法では分かりにくい部分もある。編集者に聞くと、箸にも棒にも掛からない翻訳を受け取って、泣く泣く自分で直すことが少なからずあると話してくれる。今年の正月休みにも、めったにない9連休がすべて、翻訳の直しで飛んでしまったという編集者がいるはずだ。書店に並んでいる翻訳書のうちかなりの部分は、編集者が手を加えてようやく出版されたものである。だから、翻訳書を検討するときは、後半部分もみってみるべきだ。編集者も時間に追われているので、後半になると直しが甘くなることが多いからだ。

もちろん、翻訳の質をどのような基準で評価するかによって、検討結果は変わってくる。翻訳の質を判断する基準はさまざまなので、基準が違えば判断が正反対になることもある。出版翻訳の世界では、訳文の日本語としての質を重視することが多くなっている。日本語で書かれた本としてみた場合に、すぐれた文章になっているかどうか基準にされることが多いのだ。言い換えれば、原著者が日本語で書いたとすれば、こう書いたらと思うものになっているかどうか基準になる。原文が透けてみえるような文章は嫌われることが多い。この基準でみて、どうも質の低い訳書が多いようだと思えるのであれば、その分野では翻訳者の層がそれほど厚くないと確認できる。

しかし、出版翻訳を目指している人はきわめて多いので、競争が激しいのではないだろうか。この質問に対しては、こう答える。出版翻訳者になりたい人はたしかに多い。そういう意味では供給は多い。だが、供給があるだけではだめだ。発注者である編集者の要求する質を満たせる供給でなければならぬ。こういう供給を「有効供給」と名付けるなら、出版翻訳の世界にはたしかに供給は多いが、有効供給が不足している

分野が多いといえる。

「有効供給」というのは、「有効需要」から思いついた言葉だ。たとえば、高級スポーツカーが欲しいという人はたくさんいるはずだ。だが、1000万円を越える価格をみてとんでもないと思う人の需要では意味がない。この価格でも買うという需要だけが意味のある需要だ。これを有効需要という。おなじ考えを供給にあてはめれば、有効供給になる。編集者が発注しようとは思えない質の翻訳しかできない翻訳者がどれだけいても、意味がない。意味があるのは編集者が安心して依頼できる翻訳者だけである。これを有効供給と呼ぼう。この意味での有効供給が不足しているのなら、新規に参入する余地が十分にあるといえる。

産業翻訳で実績がある人が出版翻訳に進出したいのであれば、まずは市場の現状を検討してみるようすすめる。有効供給がたしかに不足しているようなら、つまり自分が引き受ければもっと質の高い翻訳がだせると確信できるのであれば、参入障壁はそう高くないといえる。出版翻訳の質を高めるためにも、産業翻訳で実績のある人たちがたくさん進出してほしいと願っている。

### もうひとつの問題

だが、じつはもうひとつ問題がある。有効供給に対応する有効需要が不足している可能性があるのだ。需要はある。自分が取り組みたい分野で、年間にどのくらいの点数の翻訳書が出版されているかを調べれば、需要があることはすぐに分かる。だが、需要は有効需要とはかぎらない。

産業翻訳で実績がある人なら、翻訳の仕事で十分に食べていけることを実感しているはずだ。生活できるだけの料金を払ってくれる仕事がある。翻訳者はたいてい、それ以上の収入を要求していない。人並みの生活ができればいい。だから、産業翻訳には有効需要が十分にあるといえる。ところが、出版翻訳では生活できるだけの印税が入ってくる仕事は、意外なほど少ない。有効需要が意外なほど少ないのだ。そして、出版翻訳には食べていけない仕事が多すぎる。

何年か前の話だが、ある出版社の編集者から質問を受けたことがある。その出版社は翻訳物を中心に行っているが、翻訳の質の低さに毎回泣かされているという。もっと質の高い翻訳者はいないのか、どうすれば探し出せるのかというのが質問の内容だった。その出版社については、少しばかり評判を聞いていた。翻訳学校

で教えていたころの受講生のひとりが、はじめての訳書をだしたのがその出版社だったからだ。話を聞いて驚いた。分厚い本で、翻訳にたっぷり半年かかったのに、印税収入が20万円にもならなかったというのだ。実績を作りたくて引き受けただけで、これではやっていけませんと話していた。翻訳者にこの程度しか支払えないのであれば、もっと質の高い翻訳者に依頼しても、断られるのが当然である。打つ手があるとは思えない。

これは極端な例だが、出版社が部数を絞り込み、印税率まで引き下げようとしている現状では、出版翻訳で食べていくのが難しくなっているのは事実だ。それでも翻訳の引き受け手がいるのは、何か別の要因がはたらいているからだ。たとえば、出版翻訳で実績を作りたいから、自分の名前で本を出す夢が叶うから、出版翻訳が好きだから、原著に魅力があるからなどの理由があって、引き受ける人がいる。これでは長続きしない。翻訳者が不足するのは当然である。

要するに、有効供給が不足しているのは、有効需要が不足しているからでもあるのだ。

需要と供給の関係は絡み合っている。有効需要が少ない一因はあきらかに有効供給が少ない点にある。質が低い翻訳が多いのであれば、翻訳書が売れないのも当然だといえるからだ。質が低いから売れない、売れないから質の高い翻訳ができる翻訳者が集まらない。これでは悪循環から抜け出せなくなる。悪循環を打ち破るには、業界全体で出版点数を思い切って減らし、1点当たりの部数を増やすなど、何らかの工夫が必要なのだろう。それによって人並みの生活ができる仕事が増えれば、有効供給も自然に増えてくるかもしれない。

## 池央耿訳『南仏プロヴァンスの12か月』

正月には琴が似合う。和服が似合う。そして何故か、池央耿（ひろあき）の文章が似合う。『南仏プロヴァンスの12か月』（河出書房新社）を読んでみたくなる。

本の内容は題名に言い尽くされている。南フランスはプロヴァンス地方の様子を1か月ずつ12の章で紹介した軽いエッセーだ。当然ながら第1章は「1月」と題されている。その冒頭部分を、池央耿の訳とピーター・メールの原文で紹介しよう。

新しい年は昼食で明けた。

毎年のことながら、大晦日というのは気が重い。泣いても笑ってもあとわずか、越すに越されず越されずに越す年の夜とあって、人々は無理にも陽気にふるまい、真夜中ともなれば乾杯の声もしきりにキス御免の無礼講だが、あの土壇場の空騒ぎはうんざりだ。というわけで、数マイル離れたラコストのレストラン<ル・シミアヌ>の主人が馴染みの客に料理六品とピンク・シャンパンの昼食をこてなすと聞いた私たち夫婦は、これこそ一年のはじまりを祝うにふさわしい耳寄りな話といそいそ出かけて行ったのだ。

The year began with lunch.

We have always found that New Year's Eve, with its eleventh-hour excesses and doomed resolutions, is a dismal occasion for all the forced jollity and midnight toasts and kisses. And so, we heard that over in the village of Lacoste, a few miles away, the proprietor of Le Simiane was offering a six-course lunch with pink champagne to his amiable clientele, it seemed like a much more cheerful way to start the next twelve month.

何度読んでも笑ってしまう訳だ。「泣いても笑ってもあとわずか」とか「越すに越されず越されずに越す」とか「いそいそ」などの原文がいったいどうなっていたのか、興味津々探してみると、なんとどこにもないのだ。英語でいえば out of thin air、何もないところから、いかにもそれらしい表現をひっぱりだしているのだ。

翻訳者はたいてい、亡霊に恐れ戦きながら仕事をしている。こう訳せば誤訳だと言われぬだろうか。訳抜けだと言われぬだろうか。原文から飛躍しすぎていると言われぬだろうか。実際にはたいていは誰も何も言ってくれないのが現実なのだが、それでも戦々

恐々としながら仕事をしているのが普通だ。

池央耿はそんな小心翼翼とした姿勢を毛ほどもみせない。原文は素材にすぎず、どう料理するかは訳者の勝手でしょうと言わんばかりに、自由に言葉をあやつる。だから、こういう訳文ができる。だから、何度読んでも笑ってしまう。

池央耿の訳を読むと、翻訳者はもっと自由になっていいのだと思えるようになる。自由に訳した結果に文句をつける人がいたら、原著と違うと言うのだったら、原著を読んでくださいと言えばいいのだ。いまどき、ピーター・メールの平易な英文が読めない人がいるとは思えない。でも、この原文を英文和訳のように、一語一句に忠実に訳したら、無味乾燥で読めたものではないのではないか。だから、おもしろおかしく訳したまでだ。そうする自由が訳者にはあるはず。原著と訳書は別の作品なのだから。そう居直ればいい。

もちろん、こう居直るからには、訳文が日本語としての完成度の高いものになっていなければならない。原文のものとはおよそかけ離れた文体で訳すにしても、少なくとも訳書全体で破綻がなく、内容とあっていなければならない。

『南仏プロヴァンスの12か月』はその点で成功した希有な例なのかもしれない。この本の内容は、ピーター・メールにとっては田舎の話だが、日本の読者にとってはおフランスの話だ。おフランスにはおフランスにふさわしい文体がある。池央耿の文体は、日本の読者にとってまさにこの内容にぴったりの文体だったのである。だから読者に支持された。

池さんが訳すと何でも池節になると、ある翻訳者が笑っていた。そう、何でも池節になる。池節が内容にあわなければ、途中で放り投げたくなる訳書ができあがる。あつていれば、『南仏プロヴァンスの12か月』のように最後まで楽しく読める訳書になる。原文の文体を日本語で見事に再現するのが、翻訳家の理想だろう。だが、池央耿のように、自分の文体を押し通す訳者がいてもいい。池節にあう本を見つけ出せる優秀な編集者がついていれば、楽しい本ができあがるのだから。

## 古典翻訳の鼓動

昨年暮れに翻訳出版関連の忘年会に出席し、たくさんの翻訳者や編集者と意見を交換することができた。とくに強い印象を受けたのは、古典翻訳への関心が高く、しかも数年前とは考え方が大きく変わっていたことだ。

古典翻訳というと、数年前まではごく一部の出版社が数十年前の改訳を増刷しているだけで、ときおり新訳ができることはあっても、たいていの出版社は興味を示そうとはしなかった。ところがいまでは、かなりの数の出版社が少なくともラインナップのひとつとして、古典の新訳を考えているように思える。

出版という事業はもともと多品種少量生産であり、多様性が命といえるものなので、100万部の大ヒットを狙う「売れる本」ばかりに関心が集まる方が異様だったのだともいえる。派手な本も地味な本も、「分かりやすい」本も歯ごたえのある本も、軽い本も硬い本も、多様性をもたせるために重要なのだと思う。最近、「ベストセラー作り100の法則」と銘打った井狩春男著『この本は100万部売れる』（光文社）という本を読んだが、こう考えていては著者が勤めていた取次がつぶれたのも当然だと、妙に納得した。多様な読者に多様な本を届けるのが出版の原点だから、古典というある意味で地味な分野にも関心をもつ出版社が増えるのは、健全なことだと思う。

もうひとつ、大きく変わったと思ったのは、専門の翻訳者が古典を翻訳するという考え方に、編集者のほとんどが何の疑問も感じていないように思えたことだ。ほんの10年ほど前には、ノンフィクション分野の大部分、フィクションでもかなりの部分は、専門の翻訳者が入り込めない分野だった。学者や専門家が訳すものだというのが常識になっていたからだ。いまでは、学者の牙城だった古典翻訳ですら、専門翻訳者を起用するのが不思議ではなくなっている。

たとえばイギリスの古典とされる小説を新訳で出版しようとするとき、編集者はこの人は英文学者じゃないから無理ではないかとは考えなくなったようだ。もちろん、翻訳家だからいいというわけではない。英文学者だろうが翻訳家だろうが、肩書にはこだわらなくなったというだけである。だが、肩書にこだわらず訳

者を選ぶのは、10年少し前には考えられなかったことだ。その点で、時代は大きく変わったといえる。専門の翻訳者の実力が向上し、認められるようになった結果なのだろう。

もちろんこれが逆に、学者や研究者が海外のすぐれた知識を伝える役割を果たせなくなってきた結果だとすれば、喜んでばかりはいられない。そうかもしれないと思わせる逸話がある。数か月前にクーンの『科学革命の構造』の翻訳とそれに対する批判について論じた。学者や研究者ばかりが投稿する掲示板にこの記事が紹介され、「翻訳屋」のたわごととされていたのだ。こんな言葉を平気で使う学者はそう多くないと思うが、それにしても、海外のすぐれた知識を日本の読者に伝える仕事の担い手が、学者や研究者から「翻訳屋」に移ってきている現実が認識できず、ましてやその理由が理解できないようで、滑稽を通り越して悲惨ですらあると思った。

それはともかく、時代は変わり、出版社は古典の新訳を少なくともラインナップのひとつになりうるものだと考えるようになり、その際に、専門翻訳者の起用を考えるようになってきている。そして徐々にではあるが、各社から出版される古典の新訳の点数が増えてきたようだ。

### なぜ古典翻訳か

では、現状にはどういう問題点があるのだろうか。今後の課題は何だろうか。古典新訳の流れを本格化させるには、どうすればいいのだろうか。

問題点のひとつとして、いまなぜ、古典の新訳が必要なのかが、まだ明確になっていないように思える。この問いは2つの部分に分かれる。第1になぜ古典なのか、第2に既訳があるなかで、なぜ新訳が必要なのかである。

第1の点に関してはさまざまな答えがありうる。社会科学、とくに経済の分野の古典に関していうなら、いまほど先が読めなくなった時期はないからともいえる。どの時期にも先が読めたわけではないが、80歳以下の者にとっては未経験のデフレの時代になって、

経済の常識が通用しなくなっている。こういう時期には情報を追っても無駄だともいえる。基本に帰ってじっくり考えるべき時期なのだ。それには古典が最適である。

### 読みやすさという罠

既訳があるのに、なぜ新訳が必要なのかは、もっと慎重に考えるべき点だろう。古典新訳というと、既訳は読みにくいですからねと言われることが多い。読みにくいからというのであれば、新訳では読みやすさがまず求められることになる。ほんとうにそうなのかは大いに疑問だと思う。そう思う理由として、前掲の井狩春男の著書をあげておこう。この本によれば、ベストセラーをつくるためのキーワードは「身近」につきるといふ。そして、「すらすら読める本、分かりやすく、かんたんに書いてある本」が身近な本だという(92 ページ)。要するに、古典とは正反対の性格をもった本が売れるというわけだ。

これが当たっているかどうかは問題ではない。重要なのは、これがひとつの「価値観」であることだ。これは、過去何年かに出版の世界を席卷した価値観である。この価値観が今後もつねに正しく、しかも読者の全員がこれ以外の価値観を受け付けないというのであれば、古典の出番はない。あるはずがない。だが、価値観は変わる。価値観は一樣ではない。「すらすら読める本、分かりやすく、かんたんに書いてある本」がいいという価値観はたしかに過去何年か、きわめて強かったが、今後も強いという保証はない。それに、この価値観にこりかたまっていない人も少なからずいる。この点については後に触れる。

古典を読もうという価値観は、「すらすら読める本、分かりやすく、かんたんに書いてある本」がいいという価値観とはいわば正反対のものだ。だから、新訳に読みやすさや分かりやすさを求めるのは間違いだといえるように思う。

### 後進国知識人型の翻訳からの脱却

既訳の大部分は戦後の早い時期に訳されたものである。30 年から 50 年が経過したものが大部分なのだ。このため、もう古いから訳しなおそうという意見もある。だが、「古いから」というのなら、原著はもっと古い。古典は古いから価値が高いのであって、新しいものがいいのであれば、新訳だろうが既訳だろうが、古典を読む理由はない。だから、既訳の問題は古くなったことにあるのではないし、新訳をだすのは新しくする必要があるのでない。

では既訳のどこに問題があるのか。『国富論』の 5 種類の既訳を検討する作業をこのところ続けているので、以前から感じていた点を確認できたように思える。既訳の大部分は「後進国知識人型」の翻訳になっているのだ。

後進国知識人型の翻訳がどういうものかを書いていけば、それだけで大部の本になるので、ここでは簡単に触れておくだけにする。後進国知識人型の翻訳の最大の特徴は、後進国の知識人がとても理解できるはずがないと思える先進国の知識を吸収しようと苦闘する過程で生まれたものであることだ。後進国だったころの日本と先進国の欧米との間には、知識や考え方、社会や生活、産業などの現実にとつてもない開きがあった。だが、先進国に追いつかないまでも、少なくとも植民地にされて餌食にされないためには、一刻も早く進んだ知識を吸収しなければならない。ほんとうなら分かるはずもない知識を取り入れるために使われたのが、一対一対応型、欧文訓読型の翻訳だった。

はるか遠くにあり、はるかに進んでいて、とても理解などできないものというのが、後進国知識人型翻訳の前提であった。だから、内容は理解できないまでも、一語一句を忠実に訳して、少なくとも表面だけは分かるようにする。原著の表面から内容を理解する手掛かりがつかめるようにする。これが一対一対応型、欧文訓読型の翻訳の目的である。

後進国知識人型の問題のひとつは、もともと一対一で対応するはずのない原語と日本語の間で、無理やり一対一対応を追求していることにある。その結果、原文よりも理解が難しい訳文ができあがる。解説がなければとても読めない訳文になる。翻訳は原書を読むための手引きだというのが後進国知識人型翻訳の考え方であり、訳書だけで意味を理解できるようには訳されていない。これでは翻訳の意味がないと思うのだが、そして、翻訳より原文を読んだほうがいいというのが、古典のかなりの部分で常識になっていたほどだが、いまだに、こうした既訳が売られている。

それより重要な点は、後進国知識人型の翻訳が歴史的な役割を終えたと思えることだ。日本が後進国だったころ、先進国に追いつくために苦闘してきた人たちのお陰で、欧米はいまでは「はるか遠くにあり、はるかに進んでいて、とても理解などできない国」ではなくなった。もちろん、古典の原著者が巨人であるのはたしかなので、いまでも簡単には理解などできない。

それでも、等身大の巨人として理解することが可能な条件はできている。こういう条件ができたことで、後進国知識人型とは違う翻訳が可能になっていると思える。

後進国知識人型ではない翻訳の先鞭をつけたのは、たとえば、あのヘーゲルを訳した長谷川宏である。長谷川訳のヘーゲルを読めば、いまの時代には既訳とはまったく違うスタイルの翻訳が可能であることが実感できるはずだ。

いまなぜ、古典の新訳が必要なのか、既訳のどこに問題があるのかは、きわめて重要な点である。既訳が分かりにくいから、古いからというのが理由であれば、「すらすら読める本、分かりやすく、かんたんに書いてある本」がいいという価値観を受け入れることになり、古典を訳す意味はなくなる。後進国知識人型の翻訳からの脱却こそが、目指すべき方向だと考えている。長谷川宏が切り開いた道を進むこと、今後の古典翻訳のあり方だと思う。

### 古典新訳の流れを本格化させるには

かなりの数の出版社が少なくともラインナップのひとつとして、古典の新訳を考えているのは心強いことだが、心配もある。各社からときおり古典新訳が出版されても、大量にでてくる新刊の山に埋もれてしまうのではないかという心配である。

古典は前述のように、「すらすら読める本、分かりやすく、かんたんに書いてある本」がいいという価値観とは、ある意味で正反対の価値観に基づくものだ。だから、少なくとも過去何年間に主流であった価値観とは違う価値観を強く主張しなければ、それこそ「いい本なのに売れなかった」という結果になりかねない。

価値観の問題というのは厄介なようで、じつは解決が簡単でもある。出版業界全体の価値観、読者全体の価値観を変えようと思うととんでもなく大変なことだと思えるだろうが、簡単にすりぬけることもできる問題でもある。

出版は多品種少量生産だから、ごく一部の読者に関心をもってもらえればいい。日本語の本の市場には読者になりうる人が1億2000万人ほどいるので、そのうち1%に買ってもらえれば120万部の大ベストセラーになる。古典の新訳はもちろん、そんな大ヒットを狙わないので、0.1%以下でいい。

前述のように、「すらすら読める本、分かりやすく、かんたんに書いてある本」がいいという価値観がいまの主流だとするならば、この価値観を嫌う人もいるし、そんな価値観をもっていない人もたくさんいるはずだ。そういう人たちに古典新訳の良さを伝えられれば、価値観の問題は解決する。

だがもちろん、潜在読者に古典新訳の良さを伝えるのは、それほど簡単ではない。古典新訳が個々ばらばらにでてくる状況では、いかにも力不足である。理想的なのは、いくつかの出版社が古典新訳シリーズを競い合う状況だが（1970年代後半から80年代前半にかけて、そういう状況になったが）、当面そういう状況にはなりえないだろう。

まずは、1社でいいから、そして点数は少なくてもいいから、古典新訳のシリーズを企画してほしいと願っている。それが難しければ、古典新訳を刊行する各社が協力して宣伝し販売する体制ができればと願っている。数は力という面はかならずあるのだから。

ハンディ（学習障害、どもり）を  
乗り越えた経営者による異色の  
アメリカン・サクセスストーリー。

# 奇跡の企業 ロンガバーガー物語

ディブ・ロンガバーガー著 仁平和夫訳

現代の伝説になったビジョンの人は、  
信じる力でマネジメントを変えた。

定価（本体2500円＋税）

日経BP社  
〒102-8622 東京都千代田区平河町2-7-6  
tel 3238-7200（営業）  
<http://store.nikkeibp.co.jp/>